

風船かずら ~ 花言葉「一緒に飛びたい!」~



スキルアップ研修会「知恵を出し合って、もう一歩、踏み出そう!」

基調講演 「障がい者の自立に向けて」

講師：大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類 准教授 三田優子さん

日時：1月27日(水) 10:00~11:30 三重県総合文化センター多目的ホール

《三田優子さんのプロフィール》

愛知県コロニー発達障害研究所研究員、花園大学社会福祉学部助教授を経て現職。

障がい者の話をじっくり聴き、障がい者の活動や地域生活支援に広く関わってみえます。

《主な著書(共著)》

- ・「障害者と地域生活」(中央法規出版)・「ケアマネジメント」(中央法規出版)
- ・「心にとどくホームヘルプ」(全国精神障害者家族会連合会)
- ・ケア その思想と実践3「ケアされること」共著(岩波書店)
- ・「精神障害者のホームヘルプサービス」監修(朝日新聞厚生文化事業団)など



《ケア その思想と実践3「ケアされること」共著(岩波書店)から「知的障害者の自立」の一節》

「私は他人から私の自立について何か言われると、主体性を否定されるかのような思いを持ってしまうようだ。それが私への善意と愛と思いやりに満ちたものであっても、である。しかも、実際には自分で自立だなんて難しいこと、重いことは少しも考えて生活していないことを隠した上で『放っておいてよ』と言ってのけるわけだからすごくタチが悪い。自立のためにがんばってきた記憶がないのである。しかし、知的障害があると、四〇代になっても五〇代になっても自立という目標に向かってがんばり続ける人たちが多くにびっくりしてしまう。問題は誰かががんばることを決め、望んでいるのかである。(中略)私はどう生きたいのか、まずそこを基準に、知的障害者、精神障害者、高齢者…とにかくこの社会に生きる人たちと一緒に、生きやすい社会を創ろう、と考え始めたときに社会そのものが自立するのではないかと思う。(中略)知的障害のことはわからない、福祉の知識もない、実際に障害者に接したことがない…そんな人たちにこそ、考えてほしいと思い、この原稿を書いた。町の中で、息切れしながら必死で暮らす人たちが、楽に、楽しく暮らせる町になれば、きっと自分にとっても楽な生活になるのだと私は信じるからである。」

《竹端寛さん(山梨学院大学教授)は三田優子さんの「知的障害者の自立」を読んで》

支援をするという権力関係について・・・この文章はまさしくその論点をズバリついている。社会福祉サービスを利用している側にとって、いくら契約制度であれ、「お世話になっている・をしている」という意識はなかなか利用者側も、提供者側もぬぐい去れない。その際、どうしても提供者側から被提供者側への権力関係が生じる。そのことに提供者側が自覚的でない限り、「自分すら出来ないことを障害者に強いている」実情は簡単に生じる。だからこそ、多くの障害当事者が、つらい、悲しい経験を繰り返しているのだ。三田さんの文章は、しみじみと感じ入り、読む者に余韻も残す・・・市町村の障害福祉担当者への研修などで、直接読んでもらいたい。そう思う文章だった。

(竹端寛さんのブログより 2008年10月13日)

三重県障がい者就農促進協議会
〒514-0003
三重県津市桜橋2丁目142
三重県教育文化会館1F
TEL059-253-4187 fax059-253-3359
E-mail mieshuno@dune.ocn.ne.jp